

2022 年度 個人研究実績・成果報告書

2023 年 4 月 23 日

所属	サービス創造学部	職名	教授	氏名	西尾 淳
研究課題	芸術と商業文化				
研究キーワード	芸術と商業文化・芸術性、 哲学	当年度計画に対する 達成度	2.順調に研究が進展しており、期待どおりの 成果が達成できた		
関連する SDGs項目	9. 産業と技術革新の基 盤をつくろう	11. 住み続けられるまち づくりを	12. つくる責任 つかう 責任	13. 気候変動に具体的な 対策を	

1. 研究成果の概要

2021 年度秋学期から開講された基盤教育機構設置科目「芸術と商業文化」は現在 2 年目を終え、私の研究者としての可能性を切り開く礎となった。私は、これまでクリエイターとしての実務経験から自らの問題意識として「商業文化」に対し芸術性が担保できるかというテーマに取り組んできた。実際、芸術系の大学の進路は芸術家になるか、また一般企業に就職するかという二択に絞られてしまう。ここで問題となるのは私のようにクリエイターとして企業に就職した者は概して芸術家の道が閉ざされたと思ってしまうことである。したがって、私自身もクリエイターになったとき芸術家としての道から自分の人生が大きくかけ離れたものになってしまったと考えた。しかし、研究者となった現在その考え方は大きく変奏され、クリエイターこそが真の芸術家であると確信することができたのである。

その理由は、中世の芸術家たちの事例を顧みたと、彼らは教会や貴族といったパトロンからの要求に応え、自らの芸術性をそこでいかんなく発揮してきたことによる。そのパトロンの要求はおそらく生易しいものではなかったであろう。時にはパトロンの要求に応えられなかったことによって、命の危機に直面することもあったかもしれない。だからこそ、芸術家は自らのパトロンの意図を汲み、パトロンの要求以上の作品を命がけて完成させてきたのである。このように命を削る作業こそが真実に迫る迫力を生み出し、後世に残る作品として人々の感動を喚起させてきたのである。

そのため、私の研究はクリエイターがクライアントの要望に応えるプロセスが単なる商取引以上の意義を持つということを明らかにしようとするものである。そして、そこには時代背景や環境、クライアントとクリエイターとの葛藤、さらにはその葛藤を乗り越えていこうというクリエイターの意志が存在するのである。それは、まさに中世の芸術家とパトロンの関係に類比される。実際、私もクリエイターとしての仕事において命を削る思いを何度もしてきた。つまり、クリエイターは 24 時間そのクライアントの要求に応えようとその作品の可能性を導き出そうとしてきたのである。それゆえ、私は哲学研究の中でクリエイターの仕事を確認をもってアートと呼ぶことができるようになったのである。

実際、クリエイターとクライアントとの関係は各々の価値観を止揚する行為であり、これはヘーゲルの弁証法によって説明することができる。言い換えれば、クリエイターの芸術性の可能性は弁証法をもって論証されるのである。ヘーゲルによれば、人間としての歩みに常に伴う困難をむしろ人生を前進させる力に変えていこうという考え方が肝要であったが、クリエイターの営為もまたこれと軌を一にしている。もちろん、ヘーゲルの前提としてプラトンのイデア論、特に太陽の比喻、洞窟の比喻の考え方を理解することもまた重要である。私はこの二人の知の技法をもって「芸術と商業文化」と対峙してきた。

では、その内容はいかなるものであったのか。我々はある対象物と対峙したとき、それを誰もが同じものとして認識できると考える。しかし、それは私たちがそうであると認識しているだけであって、単なる思い込み過ぎない。だからこそ、クリエイターに要求されてきたことは、一つの商品をいかに価値あるものへと変えていくことであった。つまり、クリエイターは自らのスピリッツをその対象物に重ね合わせ、その対象物が持

つ差異性を如何に際立たせるかということが求められる。言い換えれば、目の前の対象物を仮象として捉え、その本体を見極めようとするのがクリエイターとしての技法なのである。そして、そのためには、クリエイターの持つ教養が陶冶されなければならない。それにより、自らの考え方が一旦エポケーされ、想起が促されるのである。これにより、新たなアイデアが生み出され、新たな作品として現れるのである。

これをヘーゲルの言え、クリエイターの行為とは、主観的精神として作品を練り上げた上で、それを客観的精神としての他者から共感を得られる作品に純化されることなのである。言い換えれば、クリエイターの行為は相対化され、作品はもはやクリエイター自身の物でなくなる。そして、それこそが原理の思考であり、他者と結び付こうとした客観的精神へと転化された普遍性の思考なのである。この時、クリエイターの作品は誰からも納得されるものになるのである。しかし、クリエイターはその段階に留まっていたはならない。つまり、クリエイターが自らの作品により高いレベルの客観性を持たせるためにはヘーゲルの述べた絶対的精神への階段を上らねばならないのだ。以上のように、クリエイターとはヘーゲルのいう主観的精神から客観的精神、そして客観的精神から絶対的精神へと高みを不断に目指し続ける職業なのである。

この視座に至ったのは、私が毎週1回、年間で54回にわたる石井泰幸教授との哲学研究会を通してであり、今後も引き続きこの研究についてさらに深化させていく予定である。

以上が2022年度の私の研究の概要であるが、以下に2022年度の成果を列記する。

・第9回 CUC 公開講座（12月23日）講演

「サバイバルキャンプ・車バイバル・防災ロゲインの推進について」

・ぼうさいこくたい 2021 にてポスターセッション発表

「楽しい防災教育事例発表（サバイバルキャンプ in いちかわ）」

・日本不動産学会 2022 年度秋季全国大会ワークショップ パネリスト講演

「地域の自助力向上を目指す楽しい防災教育」

・基盤教育機構秋学期授業「芸術と商業文化」開講、研究の成果をもとに13回の授業として構築

・石井泰幸教授との共同研究（4月1日から3月31日までの年間54回）

2. 著書・論文・学会発表等（査読の有無及び海外研究機関等の研究者との国際共著論文がある場合は必ず記載）

【論文（査読あり）】

2023年度に、上記の研究概要を論文化する予定である。

【著書・論文（査読なし）】

2023年度に、上記の研究概要を論文化する予定である。

【学会発表等】

特に無し。

3. 主な経費

2022年度の研究計画書に沿って適切に支出した。

4. その他の特筆すべき事項（表彰、研究資金の受入状況等）

特に無し。

(本文は2ページ以内にまとめること)